

特集

小児放射線医療における遠隔医療の可能性と問題点 Light and Silhouette in Telemedicine of Pediatric Radiology

特集を企画するにあたって

雨海照祥

筑波大学臨床医学系小児外科

Teruyoshi Amagai

Department of Pediatric Surgery, University of Tsukuba

今回の特集「小児放射線医療における遠隔医療の可能性と問題点」を企画した動機は恥ずかしい、個人的な2つの体験に端を発する。1つ目は中米での突然の意外な出来事、2つ目はその1年後シカゴ小児病院を見学したときの衝撃である。これら2つの体験が私に現代のtelemedicine, teleradiologyの可能性を考えさせる糸口をくれた。巻頭にふさわしいとはとても思えないが、今回の特集号の入り口評示ということでお許しを請う。2つのエピソードをご紹介します。

1つ目の体験は中米某国に調査旅行に行ったときのことである。昼間、市内の小学校で100人近い腕白盛りの小学生を相手にその国の文部省の職員の方々と栄養調査を済ませ、やっとのことホテルに戻って仲間とビールを飲んで、ほっと一息ついたところフロントからの電話。ある日本人が面会に来ているという。何事かと不思議だったが特に断る理由もなくロビーに降りる。相手はいま話題の中心、日本外務省の外郭団体の職員。この国にボランティアで来たばかりの20代女性が2週間前より熱と咳が治まらず、市内の総合病院で診察を受けCT撮影を受けた。しかし専門医がいないので、ということで私のところへ来たのだった。私も専門医ではない。詳しい内容は伏せるが、結局写真を日本の放射線科医に3日かけてFedExの宅急便で送った。大事に至らずひと安心だった。あとで考えて、これが緊急を要する事態だったらと思う。ぞっとした。撮ったCT写真をスキャンしてパソコン経由のeメールで瞬時に日本に送信できていれば、一気に問題が解決していただろう。このとき初めて、telemedicineを思い描いた。それが丁度日本政府がIT革命を声高に唱えてい

た頃か、その後だったか定かでない。しかし日本政府のお膝元の団体が、なぜこの程度のIT技術を考えようとししないのか。ほんとに本当に不思議な思いがした。Teleradiologyの思いはこのとき初めて私にとって切実なものとなった。

その1年後、舞台はシカゴに移る。ある学会の帰りシカゴ小児病院に寄った。シカゴ小児病院といえば小児外科ではRaffensperger先生がほんの数年前まで活躍されていた病院と認識していた。彼の跡を、小柄だが屈託のない笑顔が印象的なArensman教授が継いだ。Arensman教授とはイギリス小児外科学会にお互い出席の折り親しくさせていただき、その関係もあって表敬訪問のつもりでお邪魔した。その前に彼の下で働く若者に病院内を案内してもらい、放射線室に案内されて田舎者の私は腰を抜かした。放射線診断はほぼ完全にフィルムレス。画像はディスプレイ上で処理される。オンコールの放射線科医は緊急の場合病院に来ることなく自宅で読影。意見を求めた医者や電話で討論できる。このとき遠隔放射線のコンセプトを持たない私の脳裏に再び、1年前の中米での苦い体験がリフレインした。「やはりこれだ!」。

インターネットで地球の裏側の出来事がリアルタイムで配信される現代。医療界にあってITと最も近い関係にある放射線がこの通信手段を使えないはずがないと手前勝手に考えた。しかし現実に医療現場に浸透するのかどうか。できるためには何が必要で、そのためにはどのような障害が今あるのか。ずぶの素人の私以外は皆さん、この分野にお詳しい先生方である。その可能性と問題点をご執筆いただいた。今回の特集が世界の病気に苦しむ全ての子供達の明るい未来に貢献すると信じる。